

15

熱帯 バイオマス社会

調査報告

ロングハウスからビントウルへ移住してきた人々の暮らし

市川 昌広・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

土地利用図作成の実践

クムナ川のトウバウ周辺からジュラロン川下流を事例として・・・

Jason Hon・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

関連活動記録

2013 年度全体集会報告・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

国際セミナー

「ボルネオにおける持続可能な森林管理の現状と課題」・・・ 16

プロジェクトHP 紹介・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

プロジェクト参加メンバー紹介・・・・・・・・・・ 18

スクウォッター住民が転居予定の空港近くのフラット
家賃150リンギ/月 1000戸近くある。

(写真：市川 昌広)



調査報告

ロングハウスからビントウルへ移住してきた人々の暮らし

市川 昌広（高知大学 農学部）

サラワクでは、農山村のロングハウスから都市へ人々の移住が進んでいる。ロングハウスには、高齢者ばかり目につくようになり、だれも住まない空室が増えている。都市へ移住した人々は、どこでどのように暮らしているのか。2013年11月16日～21日の間、ビントウルとその郊外を調査した。

ビントウルには、1970年代後半より液化天然ガス(LNG)の生産が本格化し、近年ではビントウルから北へ約50kmのスマラジャウに工業地区が造成され、それらでの雇用がサラワク全域から人々を吸引している。仕事はあるが、そこでの生活コストは上昇しており、特に住まいの問題は移住者にとって大きい。

移住者たちはどのように住居のコストを抑えようとしているのか。いくつかの例を紹介する。

町中に住む

ビントウルへ仕事を求めて出てきた若者は、最初は先行して出てきた家族や親戚の家に転がり込む、あるいは家を借りるなどが多いだろう。家族4、5人程が住めるところは町中では安く月に400～500リングしてしまう。親戚の家がない場合は、スクウォッターに住む者も多い。

町中のスクウォッター（写真1-3）：ビントウル開発公社(BDA)や土地測量局の認識では町中のスクウォッターは12地区ある。人口は2012年の土地測量局の調査で計2000人弱いるという。その中でも大きいスクウォッターは北部のキドゥロン道路沿いに点在している。当地は町の中心からは離れスクウォッターを形成できる土地があったことに加え、仕事場のLNG工場に近いことが大きなスクウォッターが形成された理由だろうと考えられる。実際、現在でも多くの者がLNG関連の仕事についている。家は自分で建てたという者もいれば、前居住者が建てた家を買ったという者もある。今回は聞かれなかったが、賃借している者もいるようである。水道電気は通っていないが、スバタン地区では一部でパイプが敷設されていた。スクウォッターでは特に強い住民組織は無いよ

うだ。「地区長(kutua)がいる」という者もいれば、「以前はいたが、今はいない」あるいは「いない」など、答えは一定していない。

北部のスクウォッターの現在の問題は、商業地区や



写真 1: ビントウル北部のスクウォッター：山菜とり、ここはロングハウスみたいで住みやすいという。



写真 2: ビントウル最大のスバタンのスクウォッター



写真 3: Sg. Plan のスクウォッターの裏には商業地区開発が迫る。

パーム油施設などの建設が近くまで迫っており（写真3）、近日中に立ち退かなければならないことだ。空港近くに住宅開発公社（HDC：Housing Development Corporation）が高層団地を用意している（写真4）。家賃は150リンギ／月と格安である。問題は仕事場に遠くなることと、子どもの学校を転校させなければならないことである。当初の話では、2013年3月に立ち退きのはずだったが遅れているという。だが2013年中には立ち退きになるのではないかと住民は言っている。政府からの立ち退きの命令に対して反対はしないのかと問うと、そのような行動は全くとらないという。ここに住んだ時点から、その行為は違法であると認識しており、立ち退きの命令には従うしかないと考えているようだ。

ロング賃ハウス：ピントゥル北部で華人が経営する貸家群をみた（写真5）。よく工事現場で目にする飯場のような安普請のベニヤによるロングハウス型である。10年ほど以前に建設され40戸程ある。家賃は250リンギ／月である。



写真4: スクウォッター住民が転居予定の空港近くのフラット
家賃150リンギ／月。1000戸近くある。



写真5: 華人が経営する貸家、家賃250リンギ／月

低価格家屋（low cost housing）：収入が低い人々に低価格で配給している建売り家屋がある。BDAで聞いたところでは、大きくは3つほどに分けられるようだ。ひとつはBDAが建設するRPR（Ranchangan Permahan Rakyat）事業、2つめが住宅開発公社の事業、3つ目が民間の開発企業がある一定規模以上の住宅開発の場合は、敷地の10%を低価格住宅にするというものだ。家の形としてはテラスハウスや4、5階建以上のフラットがある。ピントゥルにおけるRPRはこれまで1986年より、キドロン地区に4フェーズ、シビウに1フェーズ実施されている（写真6）。価格は2006年において68千～60千リンギットである。上記の空港近くのフラットは、住宅開発公社が開発したもので1000戸近くあるという（写真4）。

再定住スキム：宅地だけを売るスキムである（写真7）。ピントゥルにはBDAにより5ヶ所で約1200ロットが売りに出されている。スクウォッターに住んでいる人々も購入している人がある。話を聞くと、近く（Sg Plan）の宅地



写真6: キドロン地区の低価格家屋（テラスハウス型）



写真7: Sp.Planの再定住スキム。宅地販売で15,000リンギ／ロットと安いのが、湿地なので土を入れないといけない。

を14,600リンギで買ったが、湿地であるためトラック 200 台分 (100t/ 台) の土を入れないと家が建てられないという。

郊外に住む

ビントウル郊外とは、ビントウルの町中を出て、例えば ミリ・ビントウル道沿いでは 10 ～ 20km あたりである。先住民ばかりでなく中国人企業も点在する。

郊外のスクウォッター: 町中のスクウォッター (urban squatter) に対して、郊外のスクウォッター (rural squatter) と土地測量局の方は言っていた というのもあるようだ。土地測量局はそのうちの一箇所について調査したことがあり、家の分布図を見せていただいた。今回 その場所に行ったところ、すでに商業・住宅地区の開発が進んでおり、スクウォッターはなくなっていた。このように開発は急速に進んで土地利用の変化は激しい (写真 8)。



写真8: 土地測量局でルーラルスクウォッターがあるといわれた場所。行ってみるとすでに商業・住宅地区に開発されていた。



写真9: 寄せ集まりロングハウスRm.Kendawang (35 戸)。様々な地域出身のイバン人が主でカヤン人が9 戸。1970 年代前半からの木材伐採の労働者が形成した。

寄せ集まりロングハウスに住む: タタウ川河口への道沿いには 17 のロングハウスがある。最もビントウルに近いロングハウス (Rm. Kendawan, 35 戸、写真 9) には、出生地が異なる者たちが集まっている。もともとは、1970 年代前半より近隣の木材伐採が始まり、その伐採労働者がロングハウスを形成した。道ができたのは 7 ～ 8 年前だが、それ以前でもビントウルへは海をボートで 30 分、海沿いの道を徒歩 1.5 時間で至れた。サラワク各地からのイバンに加えて、トゥバウ川上流の 3 つのロングハウス出身のカヤン人 9 戸が居住している。このロングハウス長 (イバン人) は、県 (daera) の役所ではすでに正式に認められた長であるということで、Kp. Jepak の土地を買ってロングハウスを作っているとのことであった。しかし、土地測量局によれば、彼らは州有地に不法占拠して問題になっていると聞いた。

ロングハウスに住む: 上の Rm. Kendawan 以外のタタウ川河口道路沿いの 16 のロングハウスは、地元 (主に ulu tatau) 出身のイバンによるものだという。ひとつのロングハウス (Rm. Suring 17 戸、写真 10) で話を聞くと確かにタタウ川上流からのイバンが 10 戸と中心となっているが、夫婦ともにムカヤビントウル省の他河川からきている者も 7 戸ある。親戚関係が相当薄い家族が入っている可能性があるのではなかろうか。ここを含め、近隣のロングハウスのほとんどの世帯が野菜畑を有しており、生産物をビントウルで売っている。

土地を買って住む: ミリ・ビントウル道路のロングハウス (Rm. Jackson イバン人) で話を聞くと、そこは以前ブナン人の土地であり 1970 年ぐらいに土地を彼らから買って家をたてている。ビントウルあるいはその郊外で仕事をしている人が多いようだ。話を聞いた家では、アブラヤシ



写真10: タタウ川河口への道沿いのロングハウス。タタウ川上流からのイバンが主だが、他地域出身のイバンも混じる。

園を3か所(3000本)有しており、その経営から収入を得ているという。そのプナン人が集住しているのが Kp. Penan Melayu Batu 10 である(写真11)。そこには、集落の脇に宅地を販売しており、イバンが購入し、家を建てて住んでいる。2003年には3戸だったが、現在では建設中を含めると27戸あるという。村長は決まっており、現在、政府に Kp. Dayak Iban という集落名で申請中だという。

森を開き住む: ビントウルから10km 余りのところにある Rm. Banyan (30 戸)、Rm. Andrao (26 戸)、Rm. Francis (12 戸) は一箇所に混住している。ここもサラワク各地から集まってきている。詳細は不明だが、購入した土地ではなく1970 年ころ森を切り開き定住したようだ。



写真11: ミリ・ビントウル道路沿いの Kp. Penan Melayu Batu 10。集落脇に宅地を販売しており、イバンが購入し家を建てている。

以上のようにビントウルの町中あるいは郊外には、様々な形で上流域の人々が移住してきている。今後はさらに詳細に調査をすることにより、都市への移住者のぐらしについて全容を明らかにしていきたい。

土地利用図作成の実践 クムナ川のトゥバウ周辺からジュラロン 川下流を事例として…

Jason Hon (WWF マレーシア)

参考資料

衛星画像

高解像度のマルチスペクトル仕様のパンクロマチック衛星画像は Digital Globe (<http://www.digitalglobe.com>) より2度に分けて購入した。注文番号は 052896239040_01 (01 および 02 で使用分) および 052927222010_01 (01 で使用)。このレポートではこれらの画像に地理的特徴に応じて便宜的に名称を付けて必要に応じて参照している。地域の西側に当たる部分は TubauImage (Tubau Bazaar に因んで名付けた) 東側に当たる箇所は JelalongImage (Jelalong 川に因んだ名称) (図 1 で使用) とした。この TubauImage

は 2012 年の 8 月 5-13 日の間に撮影されたイメージで JelalongImage の方は 2012 年 8 月 5 日時点のイメージとなっている。これらからマルチスペクトラル (多波長: カラー画像) とパンクロマチック (白黒) のラスタースタセットが入手できた。セルのサイズはそれぞれ 2m 間隔と 0.5 m 間隔となっている。

ArcGIS 10.1

イメージ解析ソフトには Environmental Systems Research Institute, Inc. (Esri©) 社製の ArcGIS 10.1 を使用した。データフレームの属性は DigiGlobe のデータセット上のラスタースタに準じており、世界測地系 (WGS84) ・横メルカトル座標系ゾーン 49N に基づいて投影されている。マルチスペクトラルのラスタースタデータはパンクロマチックのラスタースタデータを使って、赤・緑・青 (RGB) のカラー画像でありながら、パンクロマチック・ラスタースタと同様の解像度を得られるようにした。

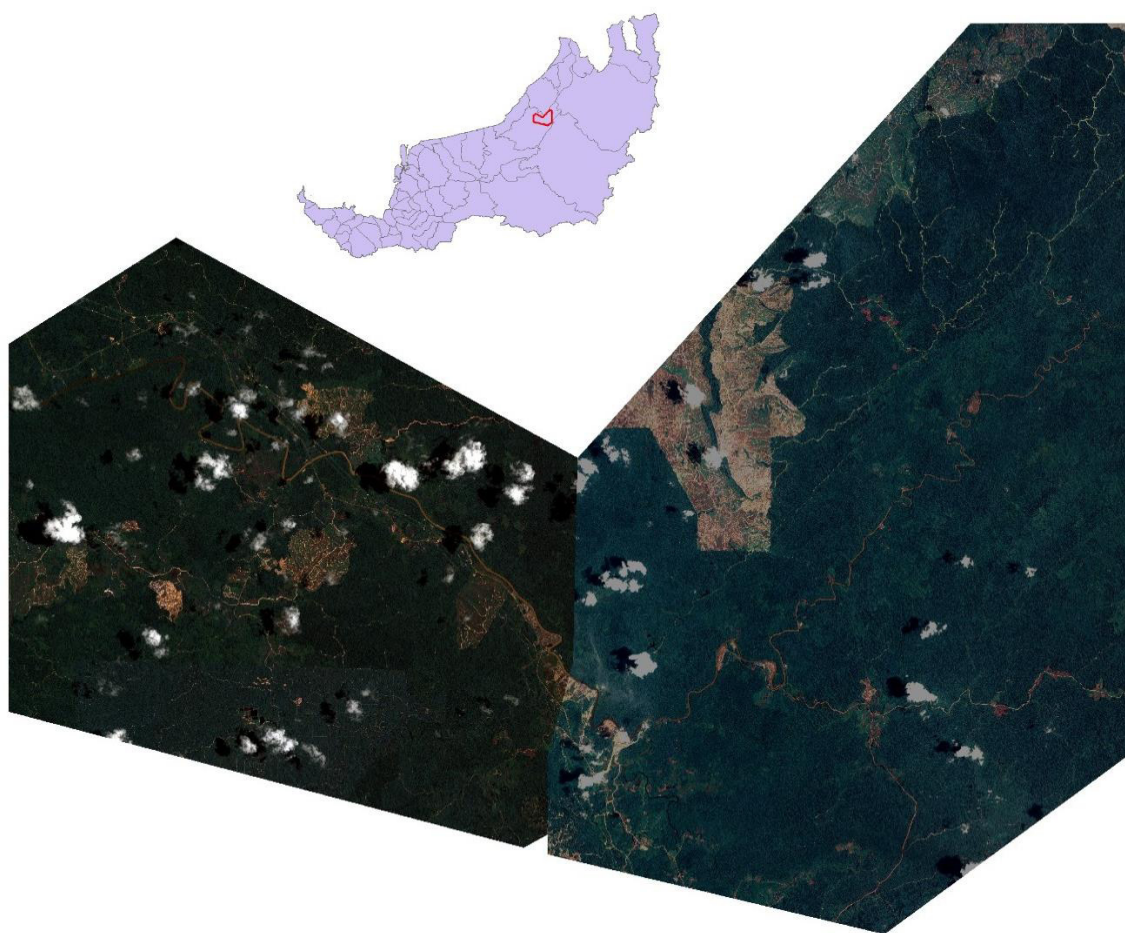


図1: 画像の対象エリアを含むサラワクの地図および、TubauImage (西部) と JelalongImage (東部) の RGB 合成イメージ

ラスターデータはまず正規化植生指数（NDVI）を使って植生の有無で分類した。次に画像を目で見て植生の境界を決め、異なったタイプの植生に分類した。植生域分類の詳細に関しては次のセクションを参照のこと。

土地利用の分類

全体で大まかに見て対象地域における土地利用に関して9タイプに分けることが出来たが、それらを詳細に見ていくことで更に細かな分類に分けることも出来た。各カテゴリを分類する際の基本ルールと基準は以下にリストアップした。目視によって分類したため、森林地域などの分類は大まかなものに留まっている。土地利用のカテゴリは以下の通り：

1. 森林地域

- 森林 — 直立する木々、密集した林冠
- 衰退した森林 — 林冠の30%以上が失われた状態、不揃いな林冠、古い轍や低灌木の存在
- 森林内の空き地 — 伐採された森林、倒木、露呈した地面、林冠の無いスペースに見える地面、時にはそうした場所が低い灌木や草地であることも
- アブラヤシ栽培目的で伐採された森林 — アブラヤシ・プランテーションに隣接する森林が開かれているような場合、恐らくそうした空間はいずれプランテーションになるものと思われる。

2. アブラヤシの植栽地域

- 成熟したアブラヤシ畑 — 結実するほど大きくなったアブラヤシが生育し、林冠は密集している。
- 未成熟のアブラヤシ畑 — 結実するほど大きくないアブラヤシ、林冠は小ぶりで見える箇所がある。
- Temuda Yr0 アブラヤシ畑 — 一年以内にアブラヤシが植栽されたテムダ
- プランテーション・テラス — プランテーションの為に整地されたもののまだ植栽されていない地域

3. テムダ（焼畑とその休閑林）

- 古い休閑林 — 元焼畑所有耕作地で5年以上経年している地域
- やや古い休閑林 — 元焼畑所有耕作地で2-5年間休閑状態にある地域で現時点では雑草や灌木に覆われている地域
- 新しい休閑林 — 焼畑が行われてから2年以内の休閑林。灌木に覆われているか、植栽されて間もない状態
- プランテーション・テラス — プランテーションの為に整地されたもののまだ植栽されていない地域

4. 換金作物栽培地

- ゴム — ゴム・プランテーション
- 果樹園 — ドリアン、マンゴー、ジャック・フルーツ、ヤシ等の高木の果樹園
- その他の換金作物栽培地 — タピオカ、コショウ、などの畑

5. アカシア

- アカシア・プランテーション — アカシア植栽林（他樹種が植えられている可能性もある）
- 比較的最近植栽された、または皆伐されたアカシアの植栽地 — 現存するアカシアプランテーションに隣接する地域でプランテーション拡張目的で皆伐された、あるいは最近植栽された土地

6. 水系

- 主要河川 — クムナ川、トゥバウ川、ジュラロン川
- 小河川 — 主要河川の支流あるいはその上流域
- 灌漑地 — 灌漑目的で造成された人工の水路、多くの場合アブラヤシ栽培地から泥炭地水の排水目的で作られている
- 池沼 — 天然あるいは人造の溜池や湖、水産用の養殖池も含む

7. 道路

- 主要道路 — Simpang Bakun とトゥバウを結ぶハイウェイ
- 周辺道路 — 主要道路から分岐して伸びる幹線道路、主要な居住地を結ぶ道路
- 伐採道路 — 未舗装で、主に伐採のために利用される
- プランテーション道路 — アブラヤシ・プランテーションの敷地内に作られた未舗装の道路

8. 人工建造物

- 建物類 — 住居、店舗、村落、医療施設、学校およびその他の建築物
- 貯木地 — 伐採木の集積所
- 送電線 — 高圧送電線

9. Keresia プランテーション

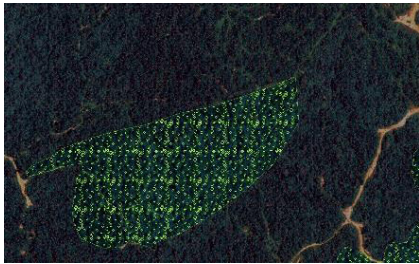
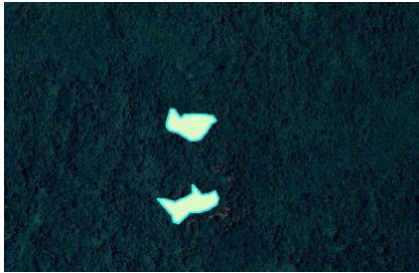
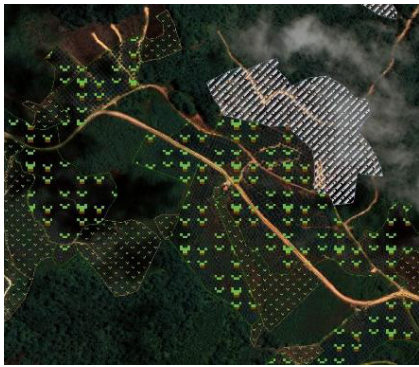
(Keresia 社のプランテーションに限定した別カテゴリ)

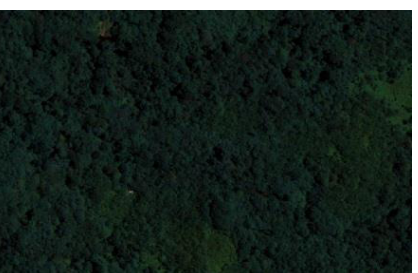
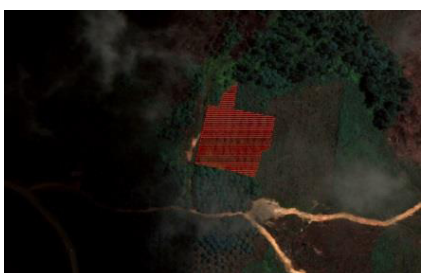
- 事務所およびスタッフの居住施設
- アブラヤシの搾油施設
- 廃液処理池

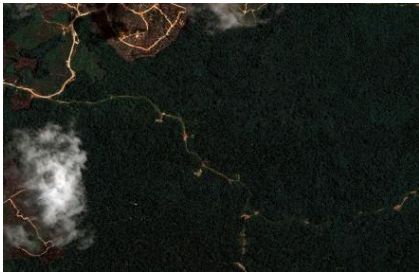
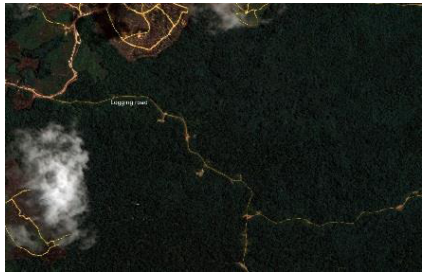
10. 草地と灌木

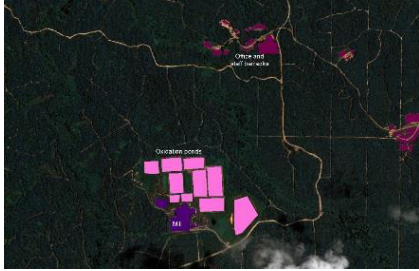
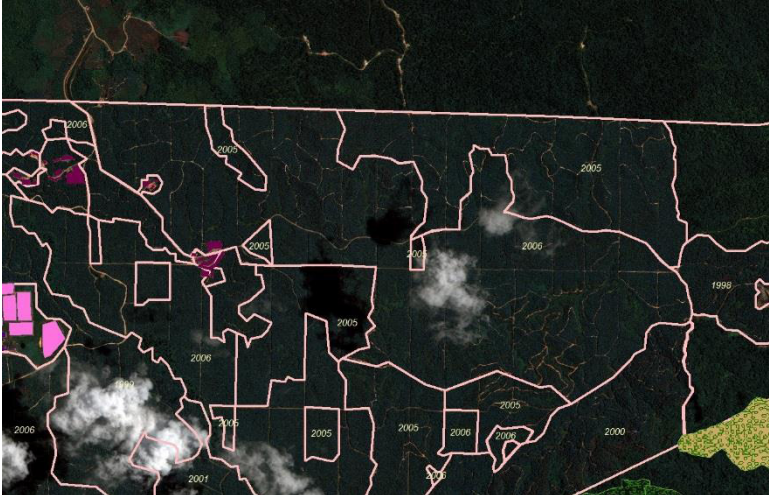
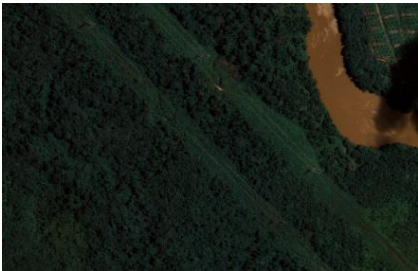
道路、送電設備や居住地の造成に伴って出来た雑草や灌木に覆われたゾーン

次ページ以降に取得した画像データ上でのカテゴリ別の該当する地域のサンプルを示す。

主分類	詳細区分	ArcGis 上での レイヤー名	ラスター・データセット例	
森林	森林	Forests		該当する範囲 
	衰退した森林	Degraded_forest		
	森林内の空き地	Forest_clearing		
	アブラヤシ栽培 目的で伐採され た森林	Forest_clearing_oil_palm		
アブラヤシ	成熟した アブラヤシ畑	Oil_palm_plantation-mature		
	未成熟の アブラヤシ畑	Oil_palm_plantation-young		
	当年に植栽された アブラヤシ畑	Oil_palm_plantation_Yr0		
	プランテーション・ テラス	Plantation_terrace		
	育苗場	Nursery		

主分類	詳細区分	ArcGis 上での レイヤー名	ラスター・データセット例	
アブラヤシ	伐採されたテムダ で比較的最近植栽 されたアブラヤシ	TemudaYr0_ OilPalm		該当する範囲
				
	古い休閑林	Temuda_old		
	やや古い休閑林	Temuda_ intermediate		
テムダ (焼畑とその 休閑林)	新しい休閑林	Temuda_ recent		
	焼畑地	Temuda_ bare_ ground		
				
換金作物 栽培地	ゴム	Rubber		
	果樹園	Orchard		
	その他の換金 作物栽培地	Cash_ crop_ others		

主分類	詳細区分	ArcGis 上での レイヤー名	ラスター・データセット例	
アカシア	成熟したアカシア・ プランテーション	Acacia_plantation		該当する範囲 
	比較的最近植栽 された、または皆 伐されたアカシア 植栽地	Acacia_ recent_ planting_ or_ recent_ clearing		
水系	主要河川 (クムナ川)	River_ Sg_ Kemena1		
	小河川	Small_rivers		
	灌漑地	Irrigation		
	池沼	Water		
道路	主要道路	Simpang_ Bakun_ Tubau_ main_road		
	周辺道路	Secondary_road		
	プランテーション 道路	Plantation_ roads		
	伐採道路	Logging_roads		

主分類	詳細区分	ArcGis 上での レイヤー名	ラスター・データセット例	
人工建造物	建物類	Building	該当する範囲  	
	貯木地	Logpond		
	送電線	Powerline		
Keresa プランテーション	事務所および スタッフの居住施設	Keresa_ Plantation; Office_ and_staff_ barracks_ Keresa; Palm oil refinery; and Oxidation Ponds. Data on planting plan for oil palm according to year is embedded in the Keresa_ Plantation layer.	  	
	アブラヤシの搾油 施設			
	廃液処理池			
草地と灌木	草や灌木に覆わ れた地域	Grass_ and_ shrubs	 	

結果

2種のラスター・データセットを用いることで全体の96.84%のエリアを分類することが出来た。残りの3.16%のエリアは雲に隠れていた分で、視認できずカテゴリ分類が出来なかった箇所である。

全体の中で一番大きな範囲を占めたのが森林エリアでその割合は55.33%に上った。ただしこの中で健全な状態の森林は2.59%に過ぎず、残りの52.74%の森林は伐採地あるいは衰退林に分類されるものであった。

その次を占めたのは所有耕作地で対象地域全体の21.85%を占めていた。内訳をみると古い休閑林が17.53%と一番大きな分量を占めていた。やや古い休閑林と新しい休閑林が続いた。やや古い休閑林と新しい休閑林に関して合計値3.67%としたのは多くの場合、これら2つのカテゴリに分類される土地利用が重なっているからである。すでにあるテムダに隣接する最近皆伐された森林の場合、その土地はほぼテムダと見なすことが出来るので「焼畑耕作地」とカテゴリ分けし、対象地域の0.65%を占めている。テムダの中では比較的最近、例えば2年以内に耕作が行われた休閑林は3.99%を占めていて、住民たちは焼畑目的でほんのわずかな土地しか利用していないことになる。面積に換算するとこれは528.10ヘクタール、該当する面積全体の0.85%を占めることになる。加えて該当地区の0.11%を占めるテムダにはアブラヤシの植栽地に換えられた計算になるが既に若いアブラヤシが植えられている土地もその多くが元々は所有耕作地だったことを考慮するとこの数字は控えめ過ぎるとも言えよう。

対象地域中でアブラヤシの植えられている土地は全体の15.92%を占めていて土地利用のカテゴリ分けで言えば3番目の位置を占めている。アブラヤシの植栽地では成熟したアブラヤシが植わった土地は9.12%、5,666ヘクタールに上る。未成熟のアブラヤシの植生地が6.36%、3,954ヘクタールでそれに続いている。対象地区の約0.32%の土地はプランテーション・テラスに分類されると思われるがこれはいずれアブラヤシが植栽されるとしき土地である。アブラヤシが植栽されたテムダにおいてアブラヤシ栽培を目的として最近切り開かれたものなのか、それとも既存のアブラヤシ・プランテーションが拡張された

結果なのか、その判別がはっきりとしない土地利用も見受けられる。企業経営による大規模なオイルパーム・プランテーションと小作農が運営するプランテーションの境界線も明確に引くのは難しく、結果として土地利用区分の中で重複を招くことにつながっている可能性がある。

今回の調査対象地区はSarawak Planted Forest社の対象地域に収まってはいるが、土地の大部分はまだアカシア・プランテーションにされてはいない。アカシアが植林された土地、または植林されつつある土地の比率は対象地区の僅か1.35%に過ぎない。

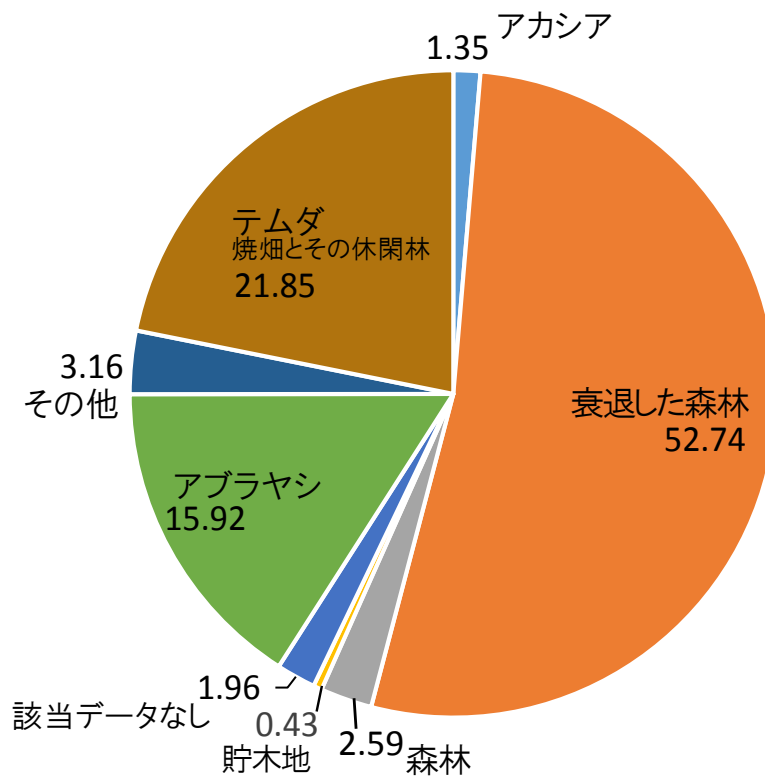
著者：Jason Hon 翻訳：中根英紀 監修：鯨島弘光

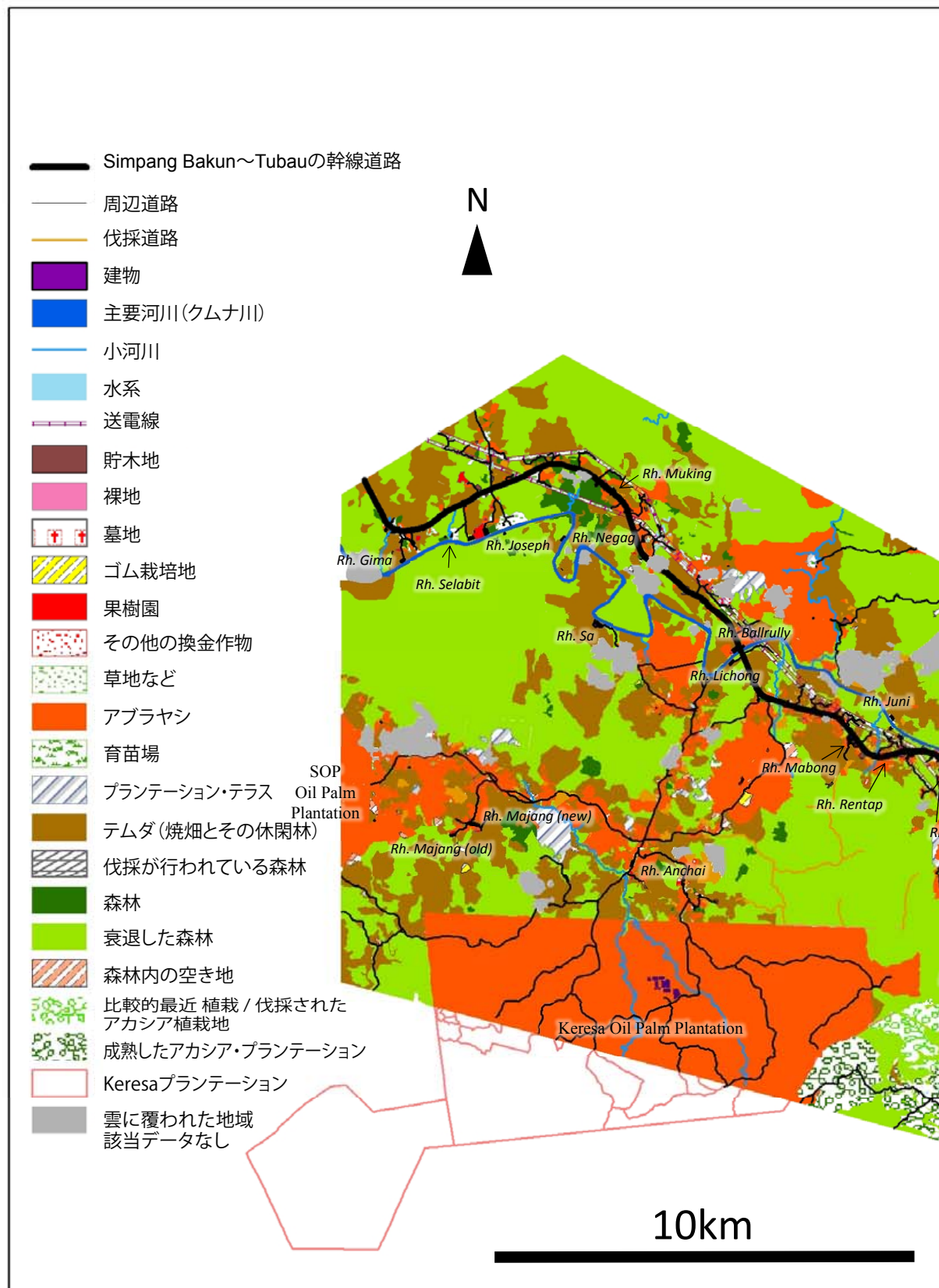
本稿は Jason Hon 執筆による英文記事を翻訳したものである。

表1：プロジェクト対象地域における土地利用種別占有率

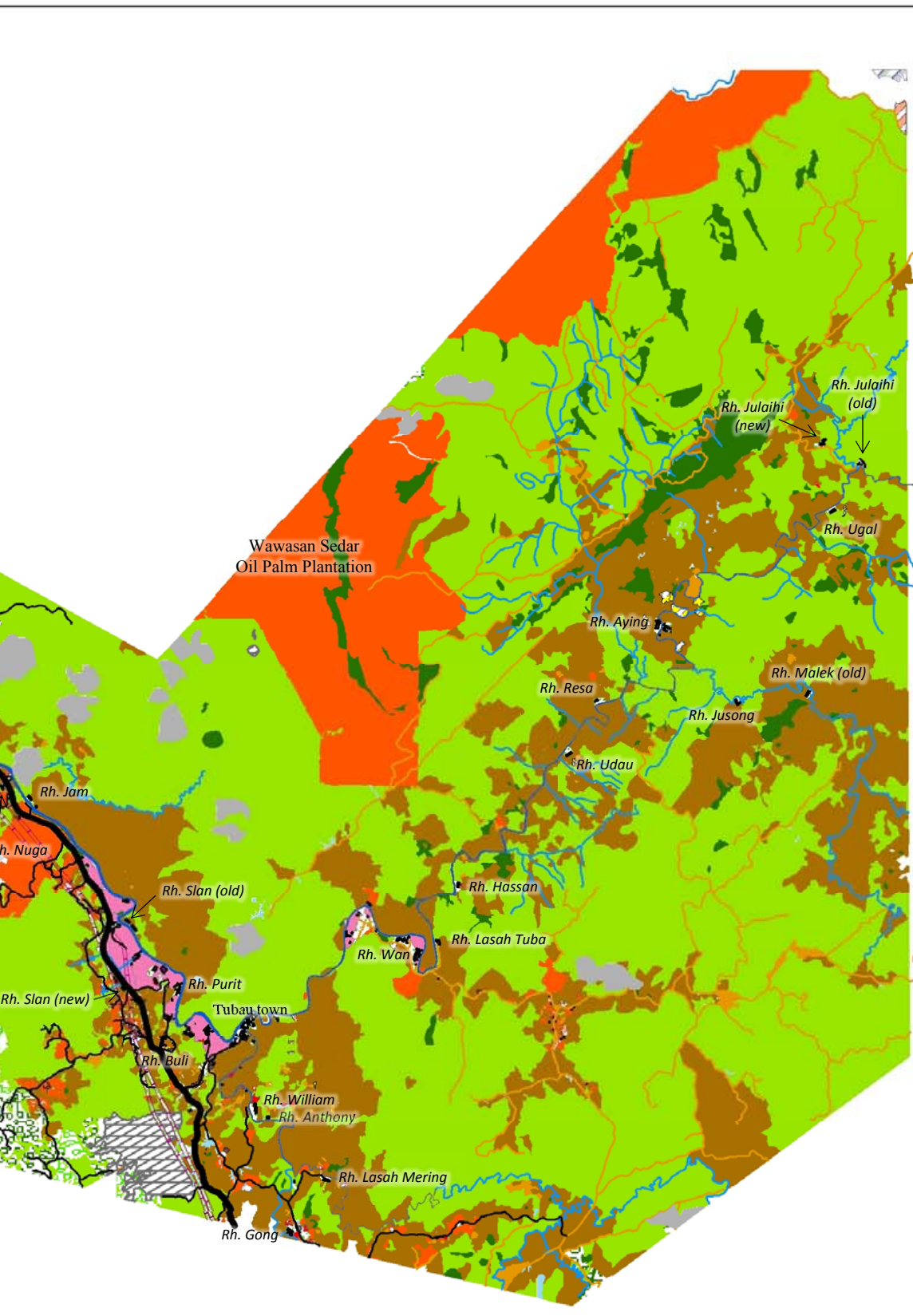
	土地利用カテゴリ	土地利用区分	面積 (ha)	占有率 (%)
1	全図	全図	62,133.79	100
2	アカシア	植栽されたアカシア	590.22	0.95
3	アカシア	比較的最近植栽されたアカシア	245.66	0.40
4	テムダ	焼畑地	404.80	0.65
5	テムダ	やや古い休閑林	1,750.72	2.82
6	テムダ	古い休閑林	10,893.70	17.53
7	テムダ	新しい休閑林	528.10	0.85
8	アブラヤシ	Temuda Yr0 アブラヤシ畑	69.13	0.11
9	アブラヤシ	成熟したアブラヤシ	5,665.98	9.12
10	アブラヤシ	未成熟のアブラヤシ（三年未満）	3,953.61	6.36
11	アブラヤシ	プランテーション・テラス	201.41	0.32
12	森林	森林	1,608.45	2.59
13	衰退した森林	衰退した / 最近伐採された / 荒廃して間もない森林	32,685.78	52.61
14	衰退した森林	森林内の空き地	84.53	0.14
15	貯木地	貯木地	266.32	0.43
16	該当データなし	雲によって覆われた地域 / 該当データなし	1,219.12	1.96
17	その他	その他	1,966.27	3.16

図2：主な土地利用のタイプの全体比率を表すチャート





ジェラロン川からトゥバウ、クムナ川中流にかけての土地利用図



関連活動記録

2013年度全体集会報告

2013年12月7-8日
(京都大学 東南アジア研究所にて開催)

12月7日、8日の2日間の日程で本プロジェクトの全体会議を行いました。今回は、プロジェクト・メンバー各位からの発表に加えて外部からもゲストをお招きし、調査活動についてお聞かせいただきました。

また、当プロジェクトの活動に関心を寄せていただいた方々にも聴講していただくことになり、これまで以上に賑やかな全体会合となりました。

ご参加・ご報告いただいた皆様、ありがとうございました。
当日のプログラムは以下の通りです。

一日目 (12/7)

(はじめに) 祖田 亮次
(プロジェクトの進展状況について) 石川 登

発表者・テーマ

竹内 やよい
“Conservation values of remnant forest (“Pulau”) used by local communities”

藤田 素子 / 鈴木 遥
“Birdhouse Construction in Bintulu”

佐久間 香子
“The Longhouse as Trade Hub on River-based Trade Network in the Interior Borneo”

目代 邦康
“Monitoring of river bank erosion using interval camera”

市川 哲 / 奥村 克巳
“Bezoar stone of *Landak*”

内堀 基光
“Human mobility in the upper Tatau region”

加藤 裕美
“Multi ‘ethno’ status of Riverine Society”

全体討議

二日目 (12/8)

発表者・テーマ

福島 慶太郎
“Spatial distribution of suspended solid concentration in Kemena and Tatau rivers”

徳地 直子
“Influence of land-use on stream water chemistry in Sarawak, Malaysia”

鹿野 雄一
“Freshwater Fish biodiversity in Sarawak”

市川 昌広
“Living strategies of rural-urban migrants in Bintulu”

岩佐 和幸
“Globalized Agribusiness and Socio-Economic Restructuring: A Case of Malaysian Palm Oil”

三柴 淳一
“Judicial decisions and laws on indigenous land rights in Malaysia”

Jason Hon
“Oil palm smallholders affecting land use change: a case study of Rumah Majang and Rumah Anchai, Bintulu, Sarawak”

鮫島 弘光
“Evaluation of ecological service of natural forests surrounding local communities”

石川 登
“From Cleavage to Interface: Riverine Catchment and Social Formation in Central Borneo”

祖田 亮次
“*Langkausin* the Jelalong: from riverine to terrestrial society?”

全体討議



写真：ゲストスピーカーと聴講者を含めて一時は席が足りなくなるほどの盛況ぶりとなった。

国際セミナー「ボルネオにおける持続可能な森林管理の現状と課題—政府、企業、NGO、地域住民の観点から」

2013年12月9-10日
(京都大学 東南アジア研究所にて開催)

12月9、10日に「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開（特別 経費プロジェクト：東南アジア研）」と基盤Sの共催で国際セミナーを開催し、2日間でのべ約120名に御参加頂きました。

基盤Sからは鮫島（企画者）、祖田、Jasonが発表を行いました。

サラワクを含めたボルネオの森林管理と、そこから生産される合板の主要な輸出先である日本のマーケットの状況を概括し、どのようにすれば持続的森林管理を普及させることができるかについての議論を深めることができました。

プログラム

Hiromu Shimizu

(Director of Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Japan)

“Welcome and Opening Address”

Hiromitsu Samejima

(Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Japan)

“Objectives of the Seminar”

.....

Hiromitsu Samejima

(Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Japan)

“Biodiversity of Tropical Rainforest in Borneo”

Ryoji Soda

(Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, Japan)

“The Trends in Forest Development and Adaptability of Indigenous Communities in Sarawak, Malaysia”

Yuyun Kurniawan

(Kutai Barat program, WWF Indonesia)

“Status of Forested Areas and Its Management Practices including REDD+ in the Upper Mahakam, East Kalimantan”

Reuben Nilus

(Sabah Forestry Department, Malaysia)

“The Current State of Forest Resource Management in Sabah”

Jason Hon

(Sarawak Office, WWF Malaysia)

“State of Forestry and SFM in Sarawak – Sharing of Experience”

Sofyan P. Warsito

(Ministry of Forestry, Indonesia)

“Periodic Inventory (IHMB): Its Role on Forest Sustainability Monitoring and Forest Management Planning”

International Seminar on

Current Status and Challenges of Sustainable Forest Management in Borneo

Views from governments, private sectors, NGOs, and local communities

ボルネオにおける持続可能な森林管理の現状と課題

—政府、企業、NGO、地域住民の観点から—



Date: 9th (13:00-17:00) - 10th (9:00-17:00) December 2013
Venue: Inamori Foundation Memorial Building 3F,
Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan
京都大学稲盛財団記念館 3F 大会議室

Organizer: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
Sponsors: The “Southeast Asian Studies for Sustainable Humanosphere” Research Program
and
“Planted forests in Equatorial Southeast Asia: Human-nature Interactions in High Biomass Society”,
Grant-in-Aid for Scientific Research (S), JSPS

For further information, please contact: sfmbor@cseas.kyoto-u.ac.jp
<https://sites.google.com/site/sfminborneo/home>

Rizki Pandu Permana

(The Borneo Initiative, Netherlands & Indonesia)

“Large-scale Forest Certification in Borneo: Challenges and Opportunities”

Mamoru Kanzaki

(Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Japan)

“Integrated Forested Area Management beyond the Sustainable Forest Management”

Kanehiro Kitayama

(Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Japan)

“Mainstreaming Biodiversity in the Management of Bornean Production Forests”

Ferry Kadi

(PT. Tirta Mahakam Resources Tbk, Indonesia)

“A Trend of FSC Products Order To PT. Tirta Mahakam Resources Tbk.”

Junichi Mishiba

(FoE Japan)

“Tropical Plywood Imports and Distribution in Japan”

Mutai Hashimoto

(WWF Japan)

“The State of Production Forests in Indonesia and Responsible Purchasing Behaviour by Japanese Timber Related Industries”

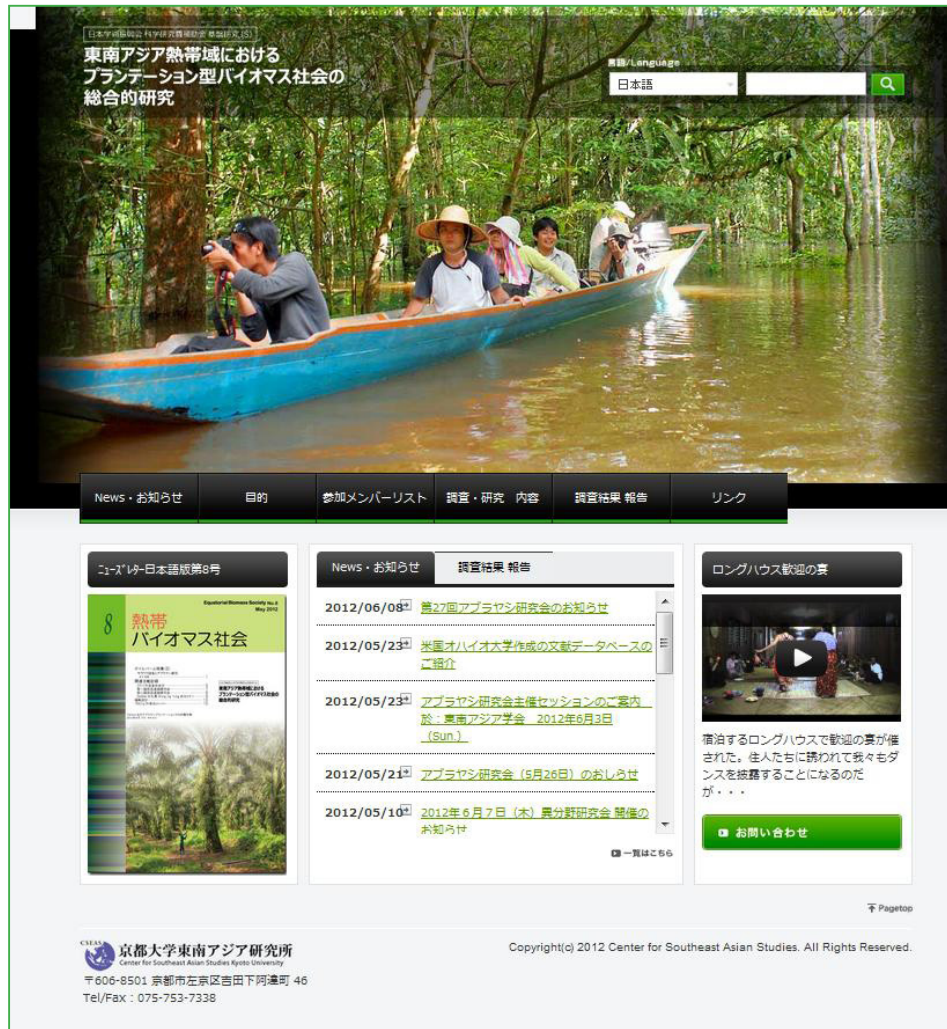
Tohru Kimura, Hiroki Yokota (TOYO MATERIA, Japan)

Akihiro Soma (JUTEC, Japan)

“Our Effort and Instance for FSC plywood business”

本プロジェクトのホームページのご紹介

<http://biomasssociety.org>



当プロジェクトのホームページを開設しております。

- ・ メンバーによる調査報告
- ・ 講演会やワークショップ等、関連活動の紹介
- ・ ニュースレターのバックナンバー（英語版もあります）
- ・ 最新の活動などについても随時お知らせしております。

是非一度、ご覧ください。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバル・ヒストリー	政策研究大学院大学
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	日本エヌ・ユー・エス株式会社（JANUS）
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林 篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	WWF マレーシア
	加藤 裕美	文化人類学	京都大学 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野 雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内 やよい	生態学	国立環境学研究所
	目代 邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：

(nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：

(<http://biomasssociety.org/>) で見るができますので、そちらの方もご参照ください。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX: 075-753-7338
<http://biomasssociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀(基盤S事務局)

キドロン地区にある液化天然ガス(LNG)のプラント。
LNG 関連産業には内陸からピントゥルに移動してきた多くの先住民が就業している。
(写真: 祖田 亮次)

